

INTERNATIONAL GUEST NEWS: OSAKA, JAPAN

見た人に想像の 余地を残す

シンプルさ

静岡市にある元小学校の建物の外壁と外壁に、突如としてその棒人間は現れた。

実はこれ、東ロンドンを中心に活躍するストリート・アーティスト「Stik」が、CCC（静岡市クリエイター支援センター）の招きで、日本の小学生の子もたちと手がけたコラボ作品。長さ約50メートルの壁にお目見えした色とりどりの棒人間たちに、通りから「あら、かわいいわねえ」「こっち向いてるみたい」と声がかかる。

「これまで、ベルリンやヨルダンのアンマンでも壁画を描いてきたけど、単に街に着いてすぐ自分の絵に取りかかるというのは好きじゃないんだ。街と、そこに暮らす人々と会話をしたい。そして、コミュニティに溶けこむ絵を描きたい。僕にとって、壁に絵を描くことは対話であり、社会的な活動なんだよ」とStikは語る。

初めは壁の前でおぼろげ、もじもじしていた子どもたちだが、10分もすると、もう何年も活躍してきたストリート・アーティストのように、慣れた手つきでスプレーを壁に吹き付ける。思わず見守るStikの頬も緩む。

何かを問いかけるようなつぶらな二つの目に、ひょろりと伸びた手足。棒人間のたたくまはいたってシンプルだ。「初めの頃は許可なく壁に絵を描いていたから、いつ警察に見つかるかわからなかった。警察が来る前に描き終えるためには、このシンプルさが必要だったんだよ」と笑う。「冗談はさておき、日本文化の影響も否定できないね。日本語では『Writing（文字を書く）』と『Drawing（絵を描く）』に同じ『かく』という言葉を使うよね。僕も、書道のように絵を描いているのかもしれない。すべてを説明してしまうのではなく、見た人に想像の余地を残す、そういうシンプルさを追求していきたいんだ」

世界とコミュニケーションをとる、
そのために壁に絵を描き始めた

棒人間がこの世に生を受けたのは、約10年前、東ロンドンの路上でだった。当時Stikは定住する家をもたず、友人宅や廃虚を転々とするホームレス状態。「完全に社会のアウトサイダーだった。誰も僕のことを見ていない、

誰も僕の声の聞いてくれない。でも僕はここに存在している！ 世界とコミュニケーションをとるために、壁に絵を描き始めたんだよ」

—なぜ、紙ではなく、壁に？

「ホームレスだった時は、紙に描くよりも壁に描く方が安全だった。持ち物を盗まれることなんてしょっちゅうだったから。紙に描いてカバンに入れてたら、盗まれる恐れがあったんだよ。壁なら誰も盗めないからね」

住んでいた廃虚の壁、個人商店のシャッター、『ビッグイシューロンドン版』販売者とともに住んでいた簡易宿泊所の向かいにある煙突—東ロンドンの至る所に姿を現した棒人間は、いつしか人々の話題にのぼるようになった。

「『君がああ棒人間の生みの親かい？』って聞かれた時は、本当にうれしかったな。路上生活は本当に孤独だったから……当時のことは今も話したくない、命の危険を何度も感じたし、暗黒時代だ。でもそこから脱するチャンスをおの棒人間が与えてくれた。壁に絵を描くことで初めて社会に入れてもらった。初めて自尊心を手に入れることができたんだ」

2012年には、英国の音楽祭「Qアワード」にノミネートされた「クイーン」のギタリスト、ブライアン・メイやU2のボノらに、Stikの作品が手渡され、軒並み彼らの心を奪った。ブライアンに至っては、彼の庭の外壁に棒人間を描いてほしいと、頼みこんだという。今では、エルトン・ジョンなど、彼のファンを公言してはばからないセレブも多い。

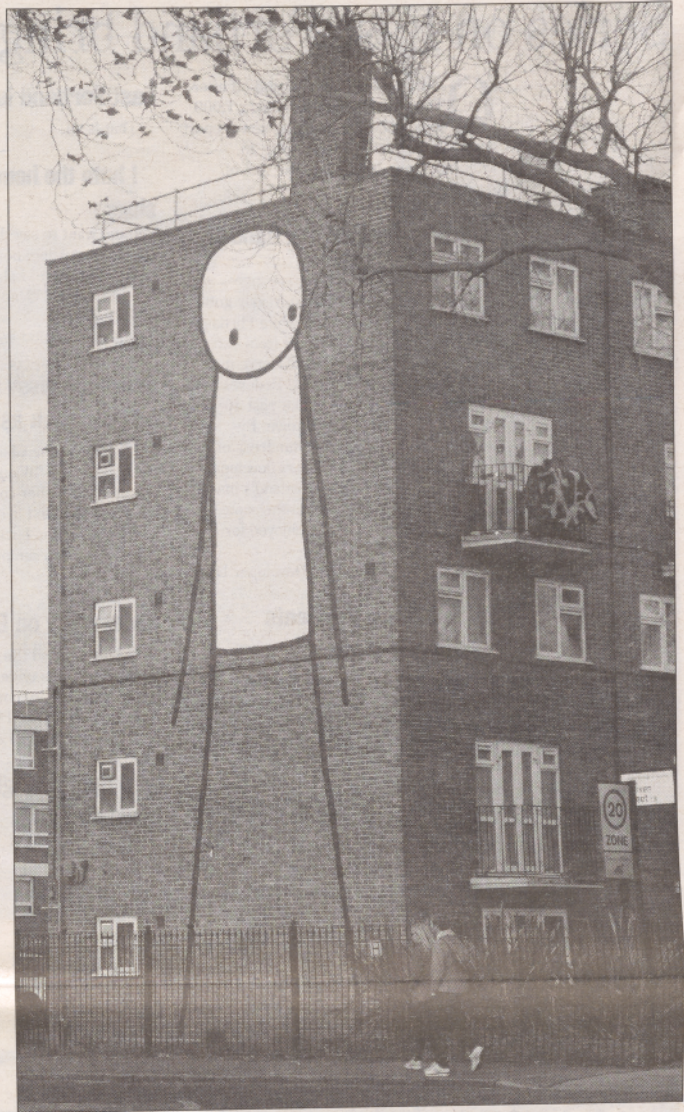
路上はみんなのもの。

アートは

路上の公共性をひろげる

もはや、ロンドンでStikを知らない人はいないだろう。もう、自分がこの世に存在していることを知らしめるために絵を描く必要はない。でも、今でも、Stikは壁に棒人間を描き続ける。時に無機的で、非人間的になりがちな都会生活を、少しでも血の通ったものにするために。

「よく自分が描いた絵の場所に戻って、目の位置を描き変えたりするん



だ。上を向いてたのを、地面に視線を落としたり、左向きだったのを右向きにしたりね。そうやっているうちに、棒人間が本当に生きて息をしているみたいに感じる時があるよ」

東ロンドンの「クイーンズブリッジロード」は、再開発で周囲にできた駅やショッピングモールの影響で、人々の足が遠のいていた。そんな忘れ去られようとしている路上に、Stikは棒人間を「派遣」。人の流れを変えた。

「路上は、単にどこかに行くための道なのではない。路上自身が人と出会うための場所なんだ。ほとんどの路上が今や企業や国家のものになってしまっているけれど、本当は路上はみんなのものであるべきだと思う。ストリー

ト・アートは、路上の公共性をひろげようと、陰ながら力を尽くしているんだよ」と語る。

今は、アーティストにとってすばらしい時代だとも言う。「資本主義が崩壊しつつあって、ギャラリーもアートを支えていく力を失いつつある。でも、動物園ともいえるギャラリーの檻を出て、野生に帰ったのがストリート・アートともいえる。ますますアートシーンはワイルドになっていくと思うよ」

今月、再来日予定のStik。あなたの街に棒人間が出現する日も、そう遠くないかもしれない。

スティック



VOODOO DOUGHNUT

THE MAGIC IS IN THE HOLE!

22 SW 3RD
& BURNSIDE
1501 NE DAVIS

OPEN
24/7!

SUPPORTING STREET
ROOTS SINCE 2003



... to the
health care you
know and trust.

Working in partnership with providers,
community health centers and social service
agencies to serve people on the Oregon
Health Plan, Health Share is building a more
accessible and coordinated care system
throughout the Tri County area.

Together we are
health share
Health Share of Oregon

503-416-8090 | www.healthshareoregon.org

f t